

時の氏神

菊池 寛

人物

相良英作

年三十位。貧しき小説家

同妻 ぬい子

二十四、五

杉本芳子

ぬい子の従妹。ぬい子と同年位

時 今日

所 東京の郊外

情景

相良英作の家、若葉の茂れる森を背景とした三間ばかりの家。玄関二畳、その次が四畳半、その次が六畳。二畳の玄関は見えない。六畳の奥の壁には、大きい書棚があり、洋書と和書とが、半分ずつ位並べられている。縁側近く机を出してある。机は、商売柄紫檀したんである。主人の相良英作は、机の横に、座蒲団を四つに折って枕とし、ねそべっている。

四畳半は、細君の居間である。奥の壁に三つ重ねの箆筒が一つ立てかけてある。箆筒の右に衣架いかがあり、二、三枚の着物と、色のあせた夏外套などかけである。箆筒の左横に障子があり、台所へ通ずる。ぬい子、自分の着物らしい冬物をほどいている。時々、障子越しに六畳間の方を気にしている。

英作は、いつまで経っても寝ている。

ぬい子 (独言のように、その実は夫に聞かせるように) 今日が、二十八日、あすが二十九日、もう四日しかないわねえ。

(ぬい子、夫の方から何か云いやしないかと耳を傾けている)

ぬい子 ああいつが来たら、月末の心配をしなくってもよくなるのかしら。家賃が四月もたまっているところへ、また一月溜めてしまっんだもの、いやになってしまっわねえ。

(夫は何とも云わない)

ぬい子 米屋だって、月末には十円や十五円は、何うしても入れてやらなきや、もう持って来なくなるわ。全く深切ないお米屋さんなのに、此方が、わるいんだわ。ほんとうに。

(だんだん声が高くなる、英作寝がえりを打つ)

ぬい子 ちよいと。ねえ貴君。

(英作、だまって返事しない)

ぬい子 ねえ、もし、起きていらっしやるの。

(まだ返事をしない)

ぬい子 もし、起きていらっしやるの。もし、起きていらっしやるのだったら。

(ぬい子、いらいらして来て、障子をはげしく開ける)

英作 馬鹿！ (突拍子もない声で叫ぶ)

ぬい子 びつくらするわねえ。そんな大きな声を出して。

英作 だって、原稿を書いてしまっまでは、この障子を絶対に開けてはいけないと云ったじゃないか。(仰向けに寝ながら唸鳴る)

ぬい子 でも、原稿を書く書くと仰しゃって、朝から寝てばかりいらっしやるじゃないの。

英作 だって、仕方がないよ。考えがまとまらない時は、どんなにあせったって、一行だっって書けやしなないよ。

ぬい子 考えをまとめるなんて仰しゃって、先刻なんか、いびきをかいて、ぐうぐう寝ていらっしやるのですもの。妾、いやになっってしまうわ。

英作 いやになったら、勝手にしやがれ。

ぬい子 ええするわ。昨夕ゆうべなんか、何処へ行っていらっしやったの。

英作 大きなお世話だ。

ぬい子 ええ大きなお世話でもねえ、貴君あなたのするままに委して置いたらどんな目に会うか、分らないんですものねえ。昨夕なんか、きつとそうよ。××新聞社へ行ってこの間の原稿料を取って、プランタンへいらっしやったのだけわ。

英作 下品な邪推をするのはおよしよ。

ぬい子 いつも、貴君の欠点をつかまえると屹度きつと下品な邪推だとおっしゃるのねえ。

英作 そうじゃないか。そうに違いないよ。

ぬい子 へえ、下品な邪推でしょうか。じゃ、貴君の袂たもとに在った五円札は、何処でお貰いになったの。

英作 (半ば身体を起し) なんだ、お前は俺の袂まで探すのかい。

ぬい子 探したら悪い。

英作 悪いとも。いくら夫婦だって、人の袂まで探す奴があるかい。

ぬい子 だって、少しでもお金が入ると直ぐ外へいらっしやるんだもの。それじゃ、たまらないわ。貴君のは、楽は外で苦は内ですもの。それじゃ、妾がやり切れないわ。貴君のは、お金があるときは、外を歩き廻って、お金がなくなるよ、家へ休息に帰って来るんですもの。それじゃ、妾が何処に立つ瀬があるの。

英作 お前と、顔を見合わせていたって、面白くないからね。

ぬい子 え、どうせそうですよ。プランタンへ行って、貴君あなたの好きな女給とでも話していらした方がよっぽどいいでしょうね。

英作 ふふむ。

ぬい子 ふふむじゃないわよ。この間の晩なんか何処へいらっしやったの。川瀬さんの処でか、たをして遅くなったなんて、ウソでしょう。

英作 馬鹿！

ぬい子 何が馬鹿です。妾^{わたくし}だって、貴君が外の女へ心を移しかけているか位は、分つてよ。

英作 外の女。そんなものがあれば、俺はもっと幸福な筈だよ。

ぬい子 ええないの。なくってよく毎晩遅くまで、お帰りになりませんわねえ。

英作 俺の自由だよ。

ぬい子 まあ、大変な自由ですな。

英作 ああ、いやだいやだ。いつだって、こうなんだからな。俺が書けないで、むしろくしゃして居ると、きつとお前がぐずぐず云って、俺の心を二倍にも三倍にも、荒^{すさ}ませてしまふんだからな。ああいやだいやだ。何処かへ行きたい。

ぬい子 ええ、それよりか、妾が何処かへ行つて上げますよ。貴君は、どうせ妾が鼻についているのですよ。どうせお互に恋愛がなくて、結婚したんですものねえ。貴君に、新しい恋愛が出来れば、妾が捨てられるのに定^きまっているのですものねえ。今の裡に、妾出て行くわ。出て行つて職業婦人にでもなった方がどれだけ気楽だか分らないわ。

英作 ああ、うるさいうるさい。頭ががんがんしてくらあ。

ぬい子 ええどうせそうでしょうよ。いやになった妾に話しかけられるんですものねえ。だってさ、昨^{ゆうべ}夕^くだって夜二時に帰って来るんですもの。それで書けないと、妾の故^{せい}にするんですもの。ああ口^く惜^くしい。

英作 ええ、うるさい。お前とは口を利かない！ ここを開けたら、承知しないぞ。

(障子を、ぴしゃり閉める)

ぬい子 ええ開けるわよ。

(ぬい子、がらりと開ける。英作やや蒼くなる)

英作 よし、もう一度開けて見ろ、ぶん殴るよ。

(また障子をぴしゃり閉める)

ぬい子 何度でもあけるわよ。

(ぬい子障子を手荒く開ける。英作火のように怒る。四畳半の方へ飛び込んで行ってぬい子の頬をぴしゃりと叩く)

ぬい子 口惜しい。(泣く)

英作 もう一度開けて見ろ。

(英作また障子を閉める)

英作 さあ、開けて見ろ。

ぬい子 開けるわよ。死んだって、開けるわよ。

(ぬい子障子に飛びつく。障子はずれる。英作、ぬい子に飛びつき、三つ四つ頬を叩く。ぬい子わっと泣き伏す)

英作 ざま見ろ。

(障子を閉め切り、また机の横に寝そべる。ぬい子、可なり泣きつづける。それから起き上る。筆筒の引出しを開け、着物を三、四枚取り出し、風呂敷につつむ。筆筒の小さい引出しから、財布を出す。鏡台の前に行って一寸顔をなおす。そして夫に知られないように、外へ出ようとする)

英作 (障子越しに) おい、お前何処かへ出るのかい。

ぬい子 出たら悪い!

英作 悪くはないさ。

ぬい子 じゃ、大きにお世話ですね。

英作 うむ、先ずそうかも知れない。だが、何処へ行くんだい。

ぬい子 外に行くところはないわ。姉さんの処へ。

英作 そうか。

ぬい子 ええそうよ。

英作 姉さんは、俺達の間係を何う思っているか知っているか。

ぬい子 ええ知っているわ。姉さんは、妾わたしに貴君あなたと別れる別れると口癖くちくせに云っていますわ。

英作 そうだろう。その姉さんの処へお前が頼って行けば、お前と俺の関係は、これきりになるかも知れないよ。

ぬい子 ええそうよ。その位なこと知っているわ。

英作 知っていれば、それでいいんだ。俺は、お前が無意識に動いていやしないかと思つて一寸警告したんだ。

ぬい子 そんなこと御心配御無用よ。

英作 そうか、じゃお行きよ。

ぬい子 ええ行きますとも。

(出かかつてから、ふと気が付いたように)

ぬい子 そうそう瓦斯ガスを点けたままにしておいた。

(ぬい子、台所の方へ入る。その時、玄関に女の声がする)

×× 御免下さい！ 御免下さい！

(英作、ぬい子が出て来るかと待っているが出て来ない)

×× 御免下さい！ 御免下さい！

(ぬい子、まだ出て来ない、英作、一寸台所をのぞいたが、ぬい子の姿が見えないらしいので玄関へ出る)

英作 ああ、何方どなたですか。

×× あの、此方は相良英作さんのお宅ですか、小説家の？

英作 ええそうです。

×× あの、ぬい子さんいらっしやいますか。妾わたし、杉本芳子です。

英作 ああそうですか。あの横浜にいらっしやる？

芳子 ええそうです。

英作 ああそうですか、一寸お待ち下さい。

(英作、四畳半へ帰って来、台所をのぞき込みながら、叫ぶ)

英作 おいおい。お客様だぞ。

(ぬい子あわてて出て来る)

ぬい子 どなた？

英作 横浜の芳子さん。

ぬい子 (当惑と駭おどろきとの表情で) まあ。芳子さん！

(あわてて風呂敷包みを押入れにかくし、玄関へ出る)

ぬい子 まあ。

芳子 まあ。

ぬい子 よくいらっしやいました。妾わたし、駭おどろいてしまったわ。

芳子 随分、しばらくでしたねえ。もう、三年位になりますわ。

ぬい子 さあ、どうぞ。

芳子 失礼させていたたくわ。

(芳子上あがって来る。見ると、ぬい子が作ったのと同じ位の風呂敷包みを持っている)

ぬい子 ほんとうにしばらくでしたわねえ。御機嫌よろしゅう。いつも御無沙汰ばかりで。

芳子 いいえ、妾わたしこそ。おvariなくて結構ですわ。

(英作、モジモジしていたが、挨拶する)

英作 僕が相良です。初めまして。

芳子 初めまして、お名前は、兼かねがね々承かねがねっていました。

ぬい子 ほんとうに、一度尋ねて来て下さればいいと思っていましたの。

芳子 今年の正月にも、一度東京へ参りましたのですよ。宅と一緒に。でも、銀座の方から此方へ参るのは大変でございますからね。

ぬい子 ほんとうですわ。銀座から此方へいらっしやる方が、横浜から銀座へい

らっしゃるより時間がかかるでしょう。

芳子 ほんとうですわ。

ぬい子 地震のときは、お手紙をありがとうございます。もう、横浜の方は、バラック立ちまして？

芳子 東京ほど、はかばかしくございませんわ。

英作 貴女あなたの方は、火事は大丈夫だったそうですが、壁なんか落ちたでしょう。

芳子 壁なんか随分落ちましたわ。

ぬい子 御主人は、やっぱり商会へ出ていらっしゃるんですか。

芳子 (一寸憂鬱になる) ええ。

ぬい子 今日は、御一緒じゃなかったのですか。

芳子 ええ。

ぬい子 お一人で。

芳子 ええ。

ぬい子 何か東京に御用でも。

芳子 あの妾わたし、家を出て来ましたの。

ぬい子 家を出ていらっしゃったって？

芳子 もう家へ帰るまいと思っっていますの。

ぬい子 まあ、どうなすったのです。

英作 御主人と喧嘩なすったんですか。

芳子 ええ、まあ。

ぬい子 ほんとうですか。

芳子 ええほんとうですの。

ぬい子 御主人は、たいへん深切な方だと云う事を承っていましたかね。

芳子 それはそうなんですけれども。

ぬい子 それになぜ喧嘩なすったの。

芳子 でも、あまり理解がなさ過ぎるのですもの。

ぬい子 そうですかね。

英作 直接には、どんな理由で喧嘩なすったんです。

芳子 (恥しそうにうつむき) お恥しくて申し上げられません。

英作 そりゃそうでしょう。あはっっ。

ぬい子 でも、お帰りにならないなんて、本当ですか。

芳子 ええ、帰りませんつもりです。

ぬい子 じゃ、これから何うなさるおつもりです。

芳子 東京に何か職業はございませんでしょうか。

(ぬい子黙っている)

英作 (ぬい子に) お前、何か心当りがありそうだね。よく、職業婦人になると

云っているじゃないか。

ぬい子 (苦笑しながら) 心当りなんかないわ。

芳子 妾、^{わたし}何からでもして行きたいと思えますの。女中でも、何でもいいのです。

ぬい子 よく新聞の案内欄などに、いろいろ広告が出ているようですけれど、いざとなると仲々いいのがございませんようですわねえ。

芳子 雑誌の編輯の手伝^{てっだい}と云うようなものはございませんか。妾、此方へ伺えばそんな口があるかと思いましたの。

英作 (苦笑しながら) そんな口は、なかなか希望者が多いんですからねえ。

ぬい子 職業婦人などとよく云いますが、いざとなるといい口はございませんわ。

芳子 でも、妾根よく探せば、ないことはないと思えますの。そして、どんな口でも見つかったら、それにかじり付いて、一生懸命に自分の生活を切り拓いて行こうと思えますの。

ぬい子 そりやねえ、何でも一心におやりになると……。

(気のないように、途中で云い止む)

英作 だが、御主人はそんなにいけない方ですか。

芳子 いけないって。

英作 つまり問題は、貴女を愛しているかいないかの問題ですね。貴女を愛していないんですか。

芳子 (誇を傷けられた如くに昂然として) いいえ、そんなことございませ
わ。

英作 貴女を愛していらっしやるなら、問題ないじゃありませんか。

芳子 でも、今日なんか随分ひどいことを云うんですもの。出て行くんなら出て行け、勝手にしろなどと云うんですもの。妾口惜しくって。

(英作とぬい子と顔見合わして苦笑す)

英作 でも、それは貴女が何か云ったからじゃありませんか。

芳子 ええそれはそうですわ。

英作 それ御覧なさい。男と云うものは、やっぱり男としての意地がありますからね、女房から何か云われると、男の意地として、つい心にもなく過激なことを云ってしまうのです。僕なども、そうですよ。原稿が書けなくって、むしろくしゃしている時、此奴が傍から何か云うと、癩に障って殴ったりなんかするんですよ。出て行け、勝手にしやがれなんてよく云うんですよ。そんな時は云わずにいられないですよ。だが、それで女房の方が、飛び出すとするですよ。普通ならば、二、三日も経てば帰って来るですね。だが、人生と云うものは偶然と云うものが、悪戯をやりますからね。貴女の場合を例に取りますがね。一時の感情からいがみ合って、お家を出るでしょう。心の底では別れる気は少しもない……。

芳子 あら、少しもないことありませんわ。

英作 まあ、ある程度あるとしてもいいですよ。亭主が血眼になって探しているのが分ったら帰って来よう。そんな気で、家を出るとしますよ。だが、貴女の場合は、ここまで無事に来られたからいいようなものの、若し途中の電車の中位で、深切そうな男からでも話しをしかけられるでしょう。家を出て、むしろくしゃしているし、寂しいし、つい甘い言葉をかけられると、その男に頼る気が起るでしょう。

芳子 あら、そんな事ないわ。そんな浮ついているのとは違うわ。

英作 そんなに違うんなら、家を飛び出さなけりゃいいじゃありませんか。

芳子 まあ、おほゝゝゝ。

ぬい子 おほゝゝゝ。

英作 とにかく、結婚した以上、容易に別れられるものじゃありませんよ。夫婦と云うものが、人生の中で一番大きい宿命ですからねえ。しかも同棲して五、六年も経てば、感覚的には鼻についていても、どこか心の底に離れられない愛があるのです。一寸した感情の衝突で飛び出して、そこから間違まちがが起って、心の底では別れたくない夫婦が、別れる場合がいくらでもありますよ。たとえば、貴女の場合です。貴女は、電車の中で、深切な男に会わなかったからいいようなものの、貴女の御主人の方です。いつもカフェなんかいらっしやいませんか。

芳子 そんな所へは、ちっとも参りません。

英作 ところが、貴女に家出されたむしゃくしゃで、きっとカフェへ行かれるでしょう。それとも待合へでも行かれるかしら。

芳子 まあ穢わたしらわしい。妾の主人に限って待合なんかへは、足踏みもした事ございませぬわ。

英作 じゃ、カフェへ行かれるとするでしょう。貴女の御主人は、失礼ですがまだお若いのでしよう。

芳子 二十八でございます。

英作 お若いですね。商会へ出ていらつしやるとすれば、ハイカラな好男子でしょう。

芳子 あら、冗談おっしゃっちゃいやだわ。でも……。あら恥しい！

英作 でも、いい男でしょう。

芳子 恥しいわ。そんなことおっしゃっちゃいやだわ。

英作 それ御覧なさい！ カフェなんかに行くとな給の方で、わいわい騒ぐでしょう。貴女の御主人だって、家へ帰ったつてつまらないから、自然腰を落着ける。女給の中では、一番背の高い感じのいい眼の下に小さいほくろがあるのう。却つて色がくつきり白く見える娘が、貴女の御主人の傍へ来て坐るでしょう。

ぬい子 まあ、貴方女給の描写、いやに精くわしいのね。

英作 なあに、空想して話しているんだ。

ぬい子 何うですかね。そんな女給が何処かにいるんでしょう。

英作 （ぬい子に）まあ、お前は黙つておいで。とにかくその女給と二言三言話をすると、この女給は案外話が分る。貴女の御主人は、文学がお好きですか。

芳子 ええ、大好きなのです。

英作 文学の話をしてみると、案外話が出る。女給に似合わず、教養がある。感じが明るくて、ハキハキしている。新時代の女と云う気がする。あくる日になつても、貴女が帰つて来ないから、同じカフェへ行く。だんだんこの女給が、好きになる。初めは、貴女の行方を探すつもりでいたのが、この女給に気を取られているので、探す気がなくなる。貴女は貴女で、この家にもいて、御主人が迎いに来たら帰つてやろうと思つていたのが、こんな訳で迎いが来ないものだから、ええそんな亭主ならと云う気になつて、いよいよ別れる気になる。御主人の方も、この女給と結婚する気か何かになつて、貴女のことを思い切る。それ御覧なさい！ 最初は、別れる気で飛び出したのではなくても、お

しまいには別れなければならなくなるでしょう。

ぬい子 (感動したる如く) そうね。

英作 お前にも分ったかい。

ぬい子 (反撥的に) 分らないわよ。

英作 何うです。芳子さん、何うしてでも、お帰りになれないのですか。

芳子 (ふさぎ込んでいる) でも、妾^{わたし}決して帰って来ないと云って来たのですもの。

英作 でもそれは、喧嘩の意地張りでしょう。意地は女の方から捨てなけりゃ。

芳子 でも、妾東京で新しい生活を……。

英作 貴女の結婚生活が不満で、新しい生活を望んでいらっしゃるのですたら、大間違ですよ。誰だって、現在の生活が不満で、もっとどこかにいい生活があるような気がするんですよ。田舎に居れば、東京の生活は、何だかいいような気がするのですよ。だが、それは夜目遠目の遠目ですよ。僕は、一昨日近所の戸山ヶ原へ行きました。そして、腰を下^{おろ}そうと思って、足下^{あしもと}の芝生を見ますと芝生が薄くて汚いのです。二、三間向うを見ると其^{そこ}処の芝生が、いかにもよく茂ってキレイなのです。で、其処まで歩いて行って腰をおろそうとすると、其処も真上から見ると、前と同じように薄くて汚いのです。所が、其処から前にいた所を見ると、今度は前にいた処の方が、よく茂っていて、キレイに見えるのです。人生もそうです。遠方から見ると、美しくキレイに見えるのです。だが、その生活の中に立つと薄くて汚いのです。薄くて汚くても、其処へ満足して、腰を下すのが人生です。

(芳子、ぬい子、黙っている)

英作 どうです。お帰りになる気はありませんかね。

芳子 でも、妾ほんとうに決心して参ったのですもの。

英作 そうですかね。僕の云っていることに間違はないつもりですがね。

芳子 それはよく分っています。

英作 そうですか。じゃ、まあよくお考えなさい。

芳子 あの、職業が見つかるまで四、五日お邪魔になってもよろしいでしょうか。

英作 (あまり元氣なく) それはどうぞ。

ぬい子 御ゆっくり。

芳子 ぬい子さん、この近所に郵便局ありませんか。

ぬい子 ええありますよ。でも、妾使つかいに行つてあげましょうか。

芳子 いいえ、結構なの、自分で行きますわ。

ぬい子 あのね、家を出て左へずつと行つて、突き当つて、少し右へ行つて、直ぐ左へ折れて二町ばかり行くとありますわ。

芳子 左へ行つて、右へ行つて、左へですね。

ぬい子 そう。

芳子 じゃ、妾一寸行つて来ますわ。

ぬい子 じゃ、妾その間に御飯まの支度にかかりますわ。

芳子 すみませんが、これ一寸何処かへおしまい下さいませな。

(風呂敷包みをぬい子受取つて、押入の中へ入れる)

芳子 じゃ行つて来ますわ。

ぬい子 行つてらっしゃい。

(芳子出てゆく。ぬい子と英作と顔を見合わせる)

ぬい子 困つたわねえ。

英作 うむ、困つた。あんな人に居られちゃ何も書けやしない。

ぬい子 それよりも寝る蒲団がないわ。

英作 こんな狭い家に、他人が居られちゃ、氣になつて、何も出来やしない。

ぬい子 ほんとうに、帰らないつもりなのかしら。

英作 どうだかね。先刻亭主せんせつののろけを云つていたじゃないか。俺が、好男子だ

ろうと云ってやったたら、嬉しがついていたじゃないか。

ぬい子 あれじゃ、未練があるんでしようね。

英作 あるだろうどころか、大有りだよ。別れる気なんかちつともないんだよ。
つまり、痴話喧嘩の延長だよ。

ぬい子 延長もいけれど、こんな所へ来て泊られちゃ迷惑ですわ。

英作 迷惑だとも。俺の家なんか、お客様どころか家族の者を容れる設備だつて
ないんだからな。

ぬい子 どうしましょう。

英作 だが、明日は帰るだろう。亭主に知らせてから、つまり自分の有難味を亭
主に知らせてから、ゆっくり帰るつもりだろう。

ぬい子 だって、ゆっくりなんか帰られちゃ此方が困るわ。

英作 今晚徹夜してでも書こうと思っていたが、これじゃ駄目だ。

ぬい子 貴君、もっと云わない。先刻の貴君の話、筋道がよく立っているわ。貴
君あんな話させると上手ね。

英作 おだてるない。お前にも半分聞かせるのだ。

ぬい子 妾わたしそう思って聞いていたの。

英作 お前、やっぱり姉さんの処へ行くか。

ぬい子 それよりか、芳子さんの問題が大問題だわ。

英作 兄弟かき牆かきにせめげども、外侮そとあなごりを禦いくか……あはゝゝ。

ぬい子 貴君何どうかして下さいよ。

英作 だって、追い出す訳にも行かないだろう。

ぬい子 ねえ、こうしない。先刻さっきの貴君あなたの話で、芳子さん随分里心がついている
でしよう。

英作 ついて居るとも。俺は家へ電報を打ちに行ったのだろうと、睨にらんでいるん
だよ。

ぬい子 そうだわ。きっとそうだわ。妾わたしもそう思ってたのよ。ねえ、貴君、妾、

もつと芳子さんに里心を付けようと思うの。

英作 何どうするんだい。

ぬい子 あのね。

英作 なんだい。

ぬい子 一寸恥しいこと。

英作 何どうするんだい。

ぬい子 貴君と妾とがね、芳子さんの前で、うんと仲よくするの。

英作 そんな事出来ないよ。だってお前、先刻俺と喧嘩したじゃないか。

ぬい子 だから、表面だけでいいのよ。なるべく仲よくして、芳子さんを当てて

あげるのよ。そうすれば、芳子さんきっと堪らなくなって帰るわ。

英作 名案だね。やって見るかね。

ぬい子 ええやりましょう。ええやりましょうよ。妾、御飯をこさえるからね。

芳子さんが帰って来たら東京中で一番仲のいい夫婦のように行動するのよ。

英作 少し面倒くさいがやろう。

ぬい子 やってくれる、嬉しいわ。

(ぬい子、台所へ行く。英作机の横でまた寝そべる所にて舞台を一時くらくする。そして、時間が四時間ばかり経ったことにする)

(舞台再び明るくなると、四畳半の方に蒲団が敷かれてい、それに芳子が寝ている。六畳との間の障子は閉められ、英作は、机に向っている。ぬい子横で昼間の着物をほどこいている。英作とぬい子と顔を見合して苦笑する)

英作 ぬい子。(非常に優しく)

ぬい子 はい。(非常に甘えたように)

英作 お前、この原稿を清書してくれないか。

ぬい子 ええするわ。妾、少しでも貴君のお仕事の手伝いが出来るのが一番嬉し

いの。

(ぬい子、原稿紙を受取り、それが白紙であるので、危く吹き出そうとする)

英作 お前、そのペンじゃ書き憎いことない。これをお使い。

(英作、硯箱の中から、錐を出してぬい子に渡そうとする。ぬい子ぷっと笑おうとするのを堪えて)

ぬい子 ありがとう。じゃ、この万年筆借りるわ。妾が、使っちゃ癖がつかないこと。

英作 大丈夫だよ。

(芳子は寝られないと見えて、寝がえりを打つ)

ぬい子 ねえ、貴君。

英作 何だい。

ぬい子 今度暇になったら、玉川へ連れて行ってくれない。

英作 ああ行こう。

ぬい子 (芝居をしているのを忘れて)ほんとう？

英作 何がさ。

ぬい子 ウソじゃない？

英作 ほんとうだとも。

(ぬい子、眼で実際にほんとうかどうかを確かめようとする)

英作 馬鹿！

(二人笑う。芳子寝られないと見えて、又寝がえりを打つ)

ぬい子 ねえ、貴君。

英作 何だい。

ぬい子 妾、銘仙がほしいの。

英作 銘仙位いつだって、買ってやるよ。

ぬい子 この頃、銘仙が随分変ってるわねえ。銘仙でお召のような飛白や、錦紗

と同じ小紋なんかあるのよ。

英作 じゃ、今度松坂屋へでも行って買おう。だが、買うならいっそお召の方がいいじゃないか。

ぬい子 (ウンだと云うことを忘れて、本当にうれしがる) そらそうよ。そらお召の方が、いくらいいか分らないわ。お召買ってくれる？

英作 よし、よし。

ぬい子 本当？ うれしいわ。

英作 (あまり本当らしいことを話してはアトで困ると思ったらしく) お前、いつか翡翠の帯留がほしいと云っていたね。

ぬい子 いや、そんな事云っていやしないわ。

英作 (苦笑して) そうだったかな。何だか云っていたような気がするがね。

ぬい子 そう、じゃ買ってくれる？

英作 今度陽文社から本が出るから、その印税で買ってやろうかと思ったのだ。
ぬい子 うれしいわ。買って頂戴な。

(芳子、先刻から輾転てんてんしていたが、堪らなくなったように、うつむけに起き直り、顔を蒲団から出す)

ぬい子 妾わたし、これで子供があれば、もう足りないところはないんだけどもねえ。

英作 何がさ。

ぬい子 だって、貴君あなたが愛して下さるでしょう。(英作、あまりに露骨なので、笑い出さんとしてやっと堪える) 妾、常々そう思っているの。貴君が愛して下さるし、これで子供でもあれば、東京中で一番幸福な妻だと思っただわ。

(英作、少しくてれて、合槌が打てない。芳子堪らなくなって咳ばらいをする)

芳子 えへんえへん。

ぬい子 (夫に云うともなく、芳子に云うともなく) 悪かったわねえ。まだ起きていらっしったの。

芳子 ええ。もう何時でしようかしら。

(芳子上半身を起す)

ぬい子 まだ、九時四十分ですわ。

芳子 新宿から、品川までは何時間かかるでしょう。

(ぬい子夫の腰のところをつつきながら、笑いをこらえて)

ぬい子 四十分もかからないでしょう。

芳子 ここから新宿までは俤くさねがありましようね。

ぬい子 ええありますとも。

芳子 妾、やっぱり帰ることにしますわ。

(英作とぬい子、一生懸命に笑いをこらえる)

英作 そうですか。それは結構ですな。僕は大賛成です。

ぬい子 おほっ、結構ですわ。

芳子 ええ帰りますわ。だって、宅だって妾を随分愛してってくれるんですもの。

(英作とぬい子、また笑いの衝動をこらえる)

英作 そりゃ、僕も信じていますよ。こうしていれば、御主人が迎いに来られる

のに定きまっていますけれども、早くお帰りになった方がどれだけいいか分り

ませんよ。

ぬい子 (隔ての障子をあけて) じゃ妾、俤を呼んで来ますわ。

芳子 ええどうぞ。

(ぬい子、戸外へ行く。芳子、いそいで着物をきかえる)

英作 どうか、御主人によくお伝え下さい。夫と云うものは、妻がある程度

以上善良である場合愛していないわけはありませんよ。同じ家に毎日一緒に

居るのですもの、人間同志としてだって、どうにもならない親しみが出来てい

るものですよ。一時、お互に感情を荒ませたって、心底の愛はお互に消えるものですか、どうぞ、もう二度とこんなことのないようにお暮し下さい。

芳子 どうもありがとう。半日でもこうしていますと、主人のいい所が分りますわ。

英作 そうでしようとも。そうでしようとも。

(ぬい子帰って来る)

英作 俤あった？

ぬい子 一緒に来ましたわ。

英作 じゃ、早くお乗りなさい。一晩でも家をあけると言うことはいけない事ですぬ。

芳子 じゃ、妾直ぐ失礼しますわ。

ぬい子 じゃ、どうぞ。

英作 今度は、御主人と御一緒に。

芳子 ぜひ、今度のお礼に伺いますわ。主人もぜひ一度上ると申していましたの。

(芳子玄関へ出ようとして)

芳子 先刻おあずけた風呂敷包み。

ぬい子 そうそう。忘れていましたわ。

(ぬい子取り出して渡す。芳子去る。引き出す俤の音。「左様なら」「御機嫌よう」の挨拶。ぬい子と英作と玄関から、帰って来る。ぬい子腹をかかえて

笑う)

英作 何が可笑しいんだ。

ぬい子 だって、あんまりうまく行ったんだもの。

英作 馬鹿！ 芳子さんが来なかったら、お前が出て行っているところじゃないか。

ぬい子 そらそうだわ。

英作 仲裁は時の氏神って、芳子さんは氏神さまだよ。

ぬい子 だって、此方だって仲裁をして上げたのじゃないの。芳子さんから云えば、此方が氏神さまだよ。

英作 そらそうだね。だが見ろ、芳子さんだって、夫の家を出ると、従妹の家へ来たって直ぐ邪魔にされるじゃないか。

ぬい子 そうだね。

英作 だが、芳子さんと云う人はいい人だよ。此方の狂言に乗って、直ぐ帰るなんて。女は、素直でなけりゃいけないねえ。

ぬい子 御主人と云う方も、きつと可愛がっているんですよ。喧嘩して出たくせに、御主人ののろけを云っているじゃないの。

英作 とにかく可笑しかったね。

ぬい子 可笑しかったわねえ。

(突然、ガラリと云う音がして、二人びっくりする)

×× 俵屋です。あの、風呂敷包みが変わっているそうです。

(ぬい子、駭おどろいて玄関へ行く)

ぬい子 大変だ。妾わたしがこさえたのと間違ったのよ。

(慌てて押入をあけて、風呂敷包みを換え俵屋に渡す。英作笑っている。ぬ

い子英作の傍に来る)

ぬい子 まあ、驚いた。横浜まで持って行かれちゃ、とんだ恥をかくところだった。

英作 それ御覧！ 家を飛び出すなんて騒いでいるから、そんな間違いが起るんだ。風呂敷包の間違ちがいだからいいようなもの、もっと大きい取り返しとのつかない間違ちがいだったら、何どうするんだい。

ぬい子 そうね、これからしないわ。

英作 どんなに喧嘩けんかしたって、くっ付ついていなきゃウソだよ。

ぬい子 でも、貴君あなたがちつとも愛してくれないんだもの。

英作 愛してやるよ。

ぬい子 そう、これから先刻さつきのように仲よくしてくれる。

英作 まあ、ある程度まではねえ。

ぬい子 貴君、先刻お召買ってくれると云ったの本当？

英作 馬鹿、ありや芝居じゃないか。

ぬい子 いやよ、妾そんなつもりじゃないのよ。

英作 じゃ、銘仙を買ってやろう。

ぬい子 だって、お召の方がやっぱいいと云ったじゃない？

英作 だってお前は銘仙にだって、お召と同じような柄があると云ったじゃないか。

ぬい子 いやな人、つまらないことを覚えているのねえ。じゃ、銘仙でもいいわ。

英作 何だか、気がせいせいした。原稿が書けそうだ。

ぬい子 かいて頂戴な。

英作 うむ。

(英作六畳の方へ行き、机の前で坐る。ぬい子自分のこさえた風呂敷包みを
ときかける所にて幕)

底本

『父帰る・藤十郎の恋 菊池寛戯曲集』(岩波文庫)

2016年10月18日発行

発行所 株式会社岩波書店